

第三節 杏村の理想主義

第一項 社会批判の観点としての理想社会

杏村の考える理想社会とはどのような社会か。実は、その社会は論理的に多元的社会を否定するものとなる。といっても、もちろんそれは一元的社会でもない。彼の考える理想社会は人格の自律と不可分であった。その社会について、杏村は形式的側面と内容的側面から説明しているのだが、まずはそれらの説明を確認したい。

形式的側面について。杏村は、単に経験論の上のみ立脚した理想社会論には賛成しない。空論に終わらないために理想は経験から離れるべきではない。しかし、理想が経験だけにもとづいて成り立つ場合、経験を越えた理想は出てこない。「あるべき」を論じたときと同様、これが彼の基本的な考え方である。そして彼は、「理想社会は社会の理想的努力の究極予想である。各人が内面的に其の人格を完全に自立化せしめ、其のいかなる行動にも非理想的なものは皆無であるといふのでなければ、理想社会と呼べる可き資格に欠損を来す」⁽¹⁾ というのだった。理想社会とは、経験論にのみもとづくのではなく、たとえ実証することが不可能であっても、それを論じるには、形式的にはかならずそれを「究極予想」としななければならない社会である。これは当然のこのように思えるかもしれないが、そうしなくてはならないことである。というのも、たとえば実現が可能かどうかといった経験にもとづく当面の予想を加えた結果として論じられる理想社会であれば、そこにはさらにその先にあると予定される、より理想的な理想社会が残ることになるからである。その意味で杏村は、形式的には「究極予想」であることを理想社会であることの条件として強調する。

内容的側面について。杏村によれば、「理想社会は、内容的にはマルクスの言ふ如く、『各人の能力に随ひ、各人の要求に随ふ』ものでなければならぬ」⁽²⁾ と語られる。これもまた当然のこのように思えるかもしれないが、そうした社会の実現は簡単なことではないであろう。というのも、「各人の能力」が個性的である上に、「各人の要求」もまた個性的だからである。社会には、構成員に対し

てなんらかの規制を加えるはたらきがある。ところが、構成員がこれほどまでに個性的であることを可能にした社会の場合、それははたして社会といえるのだろうか。このことについて、杏村は特に「要求」についての説明をさらに深めていた。この「要求」は厳密に個性的に発揮されなければならない、厳密に個性的に発揮されるということは、即ち「要求が普遍妥当性を得た」ということであった。それはどういうことか。杏村の説明は次の通りである。

この要求の発揮が、最も理想的になつた場合を考へれば、結局各個人は其の要求を最も少ない不自然によつて制限し、経験的個人は経験的個人のみによつて超個人性を帯び得る。経験的個人が普遍妥当性を得ること、換言すれば超個人化せらるゝことは、経験的個人が其の個性的なる経験性を否定して、概念的抽象的に、何等の経験性を含まざる一般抽象人に帰することを意味しない。此く考へるものは理想主義の真義を根本的に理解しないものである。理想とは経験的内容の規制形式原理であり、或る何等かの形而上学的原理では無いのである。其れ故に経験的個人が、理想的に其の当に在る可き個性を発揮したる場合は、即ち個人が普遍妥当性を克ち得た時である⁽³⁾

つまり、さらに抽象化するならば、この「要求の発揮」とは、個性が普遍化することで同時に個性化すること、を意味しての「普遍妥当性的を得た」と言い換えることができるであろう。それはどういうことか。ここでは、理想についての、「理想とは経験的内容の規制形式原理」という杏村の理解が重要になると考えられる。

彼は、ユートピアとの比較によって理想を説明している。そして、理想とユートピアとは根本的にその意義が異なるという。一般的には、将来の一定時に到達の可能性があるものが理想であり、到達が不可能なものがユートピアであると考えられている。しかし彼は、それら両者の区別はまったく逆という。

ユートピアは、本来到達の不可能なるものを、将来の一定時に到達は可能であると予想せられた架空点である。理想は永遠に我々の生活内容を規整する形式原理であり、何等此れを内容的に考ふ可きでは無い、随つて到達の可能不可能を問題にするならば理想への到達は全く不可能である。蓋し理想なる概念は必然的に反理想を予想する。随つて理想概念自身は、認識上の二元論の上に立つものであつて、価値と実在との間には、永遠に越ふ可からざる罅隙が横たは

るのである⁽⁴⁾

杏村のいう「経験的内容の規制形式原理」としての理想とは、常に实在・現実に対しての批判の観点なのである。そのために、先の「要求」について考察すると、個性の普遍化、すなわち杏村のいうところの経験的個人の「超個人化」とは、個性的な要求が普遍妥当性をもった批判の観点としての理想の下にさらされ、その修正すべきところや伸長すべきところが明確になった上で、各人の能力に応じた個性的な実現がなされる、ということの意味していたと考えられる。

そして、一元的社会に対抗して杏村の唱える多元的社会であっても、それがただちに理想社会なのではない。それどころか、理想社会を追求すると、多元的社会自体が批判され、さらには消滅することになる。彼は次のようにいうのであった。

なほ一層徹底的に右の趣旨を辿る時には、理想社会は実は所謂連合体の成立をすらも否定しなければならない。〔中略〕理想社会がより一層理想的に進むに随つて、連合体は次第に個性的に分裂し、其の地方主義を極度に発達せしめ、連合体の質と数とが無限に豊かとなる。此れの極度を考ふれば、多元的社会は実は、一元的社会よりアナキズム的社会への過渡期に横たはるものであり、究極理想社会にあつては一個人が即ち一機能体となるに至る。〔中略〕其れ故に究極に予想せらるゝアナルキイは、混沌では無くて、秩序の頂点である。通俗の社会にあつてのアナキズムに対する理解は、其の点に於て根本的に誤謬に陥つて居る。究極理想社会は、〔中略〕「各人は自分自身で考へ、自分自身で判断するならん」世界である⁽⁵⁾

ここにおいて、多元的社会さえも乗り越える、杏村の考える理想社会が示されている。その理想社会とは、「一個人が即ち一機能体となるに至る」常に究極理想社会として、そうではない社会に対する批判の観点であり、したがって、多元的社会は理想社会によって批判され、最終的には発展的に消滅すべき対象となるのであった。

理想社会について論じるときにみられる以上のような杏村の考え方は、社会概念に関してだけのことではなかった。彼の思想構造の中で、理想およびそれにもとづく理想主義が重要な位置を占めていて、それらは彼の社会改造論全般においても基本的な観点となっていた。

第二項 杏村の社会改造論の根底にある理想主義

これまで本論では、杏村の改造論といいながらも、その具体的な内容にはふれてこなかった。それは、彼の改造論が多岐にわたって社会の各分野における改造が論じられているものの、各論としてのそれぞれの内容よりも、むしろ改造論全般を支える彼の観点・思想的立場の把握が重要と考えたからである。では、彼の改造論全般を支える基本的な立場とはどのような立場だったのか。

杏村はいくつもの雑誌に改造論を発表しているが、特に継続して発表していたのが、『日本及日本人』におけるシリーズ「日本は如何に改造せらるべきか」である。これについて鹿野政直は、

ほぼ人道主義的な基調から、それゆえに改造思想の摂取へとあゆみでた思想家の〔中で〕、〔中略〕土田杏村は、なかでも逸することのできない存在であろう。〔中略〕土田が『日本及日本人』第八二六号～改巻第五九号（一九二二年一月～一九二四年一〇月）にわたって、えんえんと連載した「日本は如何に改造せらるべきか」は、右のあゆみをもっとも巨細にわたってものがたる資料である。一種こねくりまわしたようなこの長編は、いま一つ思考のダイナミズムに欠けるが、そのこと自体、さまざまの要素をとりいれつつ、矛盾なき調和をつくりだそうとするかれの苦悶をあらわしている⁽⁶⁾

と述べている。このシリーズで扱われたテーマについて、主なタイトルを列挙すると以下の通りである。現代社会の生活、世界改造の大勢、世界秩序変化の原因、現今社会人の人生観、理想主義とマルキシズム、文化生活と人格権、社会の理想的形態、経済制度の根本形態、国家の本質、改造方法の根本義、漸進か革命か、無産者の独裁、政治運動と直接行動、実際の綱領の建設、現今の教育、現今の芸術及び宗教、現今の政治、現今の経済、現今の労働運動、現今の国際政策。これらのタイトルだけでも、扱われている内容が、政治、経済、教育、芸術、宗教その他の社会生活の各分野にわたり、しかもそれらが日本におけるにとどまらず、視野が世界にまで広がっていることがわかる。さらに、各タイトルの下に扱われている細部に目をやると、そこには、デモクラシー、ドイツの賠償問題、国際連

盟、工業主義、文明、人間性、個性的な地方、価値、道徳、生存権、選挙制度、政党、賃金制度、動産と賃金、消費者組合、資本主義、アナキズム、人道主義、唯物史観、テロリズム、議会制度、教養、成人教育、文壇、児童文芸、明治時代、軍国主義、人口、農業、鉱山と水力電気、食料、動力と原料品、平和その他が論じられている。そしてさらに具体的な改造論の内容としては、たとえば、実質的にブルジョア資本主義にもとづいた普通選挙ではなく真の意味でデモクラシーを実現する普通選挙や、都会の論理に従属的ではない地方の実現などが主張されていた。このような杏村の改造論の特徴としては、改造すべき対象として論じられているものがひじょうに多様であることに気がつく。彼の改造論は、たしかに、鹿野が指摘するような、「巨細」にわたるものであったといえるであろう。だが、さらに特徴的なことがある。それは、当時の一般的な社会改造論に多々みられた、広義と狭義の改造、心的改造と物的改造の全体にわたって、鹿野の言葉を借りれば、「さまざまな要素をとりいれつつ、矛盾なき調和をつくりだそう」としていたことであった。

一連の「日本は如何に改造せらるべきか」は、その後単行本にまとめられ『社会哲学原論』（1925年）として刊行された。それに付された序論には次のように記されている。

哲学は人間の理想を批評する科学だ。すべて単なる存在と見えるものが、其の実際に理想によつて構成又は規制せられ、現に理想的努力と争闘し、更に将来、理想との結合を熱心に待ちつゝあることを哲学は我々に教へてくれた。随つて社会哲学は、社会理想の科学である。社会は単なる人類的存在では無い。其れはすべての物理的存在が理想によつて構成又は規制せらる可きである以上に理想的なる成立である。社会は意志を持つた人間の結合だ。人間の理想的努力の関係だ。全く物理的圧制的に成立して居ると見える社会的諸関係でさへ、理想との関係を無視しては、既に社会としての成立を待つことが出来ない。

〔中略〕社会の本質的部分は、其れの理想だ。理想は社会考察の前提にして同時に目標だ⁽⁷⁾

さらに、『社会哲学原論』は四篇から構成されているのだが、それぞれの篇には以下のようにタイトルがつけられていた。

第一篇 社会的現実の必然的推移と其れに内在する理想的動向

第二篇 社会理想論に於ける理想主義理念と社会主義理念

第三篇 社会理想現実の根本的形式

第四篇 文化諸形相に於ける社会理想の実現

さきほどの序論にあるように、また上記四篇のタイトルにあるように、彼の改造論は、一貫して理想を観点として展開されている。そして、「理想主義の社会目的論を建設する」⁽⁸⁾ことを求めていた杏村の改造論の立場は、すなわち理想主義であった。だがこの場合、理想主義が理想を改造の観点・基準にした立場であっても、なぜ彼はそこに立とうとするのか。

第三項 理想主義に対する批判への杏村の反論

本章第一節でみた安部からの引用文にもあったように、一般的に理想を論じることが空論を語っていると理解されることがあった。そして杏村自身が、理想主義がうけた批判を、

反駁者は曰く、然らば我々は理想を食つて生きて行けるかと又曰く、現在社会人の窮乏は其の如き呑気な議論の介在を許さない、我々は此の窮乏を^マ解釈するがために直ちに其の武器を手にしなければならぬのである、理想主義の如きは此の武器を取るに甚だ臆病なるものである⁽⁹⁾

と語っているように、現実の社会問題を解決するには理想主義は無力とみなされ、理想主義を標榜する杏村は、それに立たない改造論者、特にマルクス主義者からしばしば批判されている。そうした状況下で、杏村は社会改造にとっての理想主義の必要を繰り返し主張している。それは、理想主義に対する批判への反論であると同時に、理想主義や理想に関する説明でもあった。彼は、理想主義への一般的な批判を次の二点に大別し、それぞれに答えている。

第一に、理想主義が提示する行為の根本原理は単に形式的であって内容をもたないという批判。これに関して杏村は、理想とは何かを問われたとき、それを内容的に指示するならば、理想は無数に存在するため、到底そのひとつひとつには答えられないという。このことは真理についても同様である。たとえば、 $1 + 1 = 2$ という数学的命題が普遍妥当性をもっていたならば、それは一つの真理であ

り、同様に、 $2 + 3 = 5$ や $3 + 5 = 8$ もそれぞれにひとつの真理である。そこで、「真理を内容的に提示し居ればその数限りも無い。其れ故に、真理を提示するに我々は単に形式的に普遍妥当性をいふ」⁽¹⁰⁾ こととなり、理想についても、それが何かという問いに答えるならば、「普遍妥当性を有し得るもの」というよりほかはない。しかし、だからといって、形式的なもののみが理想であるということから、内容的な理想を排斥するわけではない。これはどういう意味か。

理想について論じる際、杏村はこのように「形式的」と「内容的」という言葉を頻繁に使用していた。ところが、彼自身にとっては基本的・常識的な言葉として特に解説の必要が感じられていなかったのかどうか定かではないが、それら形式と内容についての説明は存外に少ない。そうした中で、哲学は純粹形式の学問である、という彼の考えを述べた論文があり、そこで形式と内容のちがいに言及されていた。彼は次のように説明している。

私は考へる。元來形式的と言ひ、内容的であるといふは、一の経験の統一の見方の相違に過ぎないと。若しも一の経験が一の経験として認識せられたとすれば、其れは何等か普遍妥当なる価値の観点から統一せられて居るのである。此れを統一する側面は形式であり、統一せられる側面は内容である。統一を離れた内容といふは考へられない。〔中略〕もし形式と内容との区別が其れだけのものであつたとすれば、本来形式的と呼ばれたものも、其れより一段と高い、一段と基礎的な統一に対せられて見れば、寧ろ甚だ内容的である。此くして形式的と内容的と、二の見方は其れ々々の方向へ無限の段階を以て蓄積せられて行く⁽¹¹⁾

ここで形式と内容の関係は、それらのある関係がさらに高次の関係の中に収斂され、論理的には連続した関係を形成する、全体的には相対的な関係と理解されている。ただしまた、個々の関係において、形式と内容は、統一されるものとして、絶対的な関係にもある。そして、理想を論じられるときに使われる形式と内容も同様の意味でとらえられる。理想の形式と内容に焦点を当てた場合、形式としての理想は内容としての現実を規制する。だが、その時にはなんらかの内容的な理想が示され、それはさらに高次の形式的な理想によって規制される。杏村はこう考えているから、内容的な理想を排斥するのではなかった。

第二に、理想主義のいうところの理想とは、無限の遠方に位置し、どのような

努力によってもそれを実現することはできないという一般的な批判。杏村の観点からすれば、これは批判に相当しない。なぜならば、理想とは、永遠の努力をもつてしても完全には実現されないものだからである。彼は、

我々によつて現実的に到達出来得るものは、それは理想ではなく、理想へ到達するための一経路としての現実だ。理想は永遠に我々の生活を規制する形式であるから、一旦何等かの内容を持つたとすれば、規制原理としての理想自体は最早その内容の彼方に飛翔する。理想とユートピアとの区別はこのことによつて律せられる。理想は形式原理だが、ユートピアは内容原理だ。その努力の経路の何等かの時に、現実的に実現せられ得ると見られたものはユートピアである⁽¹²⁾

と述べている。これは先にみた理想とユートピアの違いについての説明と趣旨は同じ説明なのだが、ここでは理想が「形式原理」であるのに対して、ユートピアは「内容原理」であると明確に区別されている。また、原理としての内容と形式がまったく別のものであることが、「一旦何等かの内容を持つたとすれば、規制原理としての理想自体は最早その内容の彼方に飛翔する」と記されている。このことの説明として、第二の批判には、それを逆手にとった彼の反論があった。

永遠に理想は実現されないとはどういうことか。これを考えるのに、杏村は、実現された場合から考えてみればいいという。すると、

理想は全く形式的である。その理想が実現せられた、或は達成せられたとは、この形式が内容によつて充実せられた、形式は内容を正しく規制し得たといふことである。併し我々の生活内容は、我々の可能的なる全生活内容の僅かに一部分に過ぎない。その部分的なる生活内容を以て価値の形式を充実したとしても、又それを形式原理によつて規制したとしても、それだけでは形式は全然的に充実せられ、全然的に規制の作用を尽してはゐない。それ故にこの形式を全然的に実現するためには、凡そ我々人間によつて可能的なる生活内容は、全部的に持ち出されなければならぬ⁽¹³⁾

ということになる。しかし、可能な生活内容をすべて持ち出すことなどはできないであろう。そのため、理想が無限の遠隔地にあって実現不可能ということからおこる批判は、形式原理としての理想が本来そうしたものであって、批判として成立しないことになる。

こうした二つの批判に応えた杏村は、内容的な理想を否定しないが、やはりその形式原理としての側面を主張していた。しかし、そのことから、彼が理想を説くことが、現実から離れた空論を語っているとはならない。形式原理としての理想は現実を規制する。そしてその場合の理想は、さらに高次の理想によって規制される。では、さらに高次の理想はどこからくるのか。理想と現実の関係はひとつではない。たとえ現実のひとつであったとしても、それに対する見方はひとつではないため、理想と現実の関係は同時に複数あり得る。そこで、ある関係における理想に対して、別の関係における理想が高次のそれとなる。この高次の理想の形成には、当然、内容としての現実が基礎となっている。また、そもそも、高次の理想以前の、ある関係における理想にしたところで、その提示には、現実を完全なものとして満足していない状況があったからであり、やはり理想を語ることの基礎には現実がある。ただし、杏村が理想を形式原理であるといったり、究極理想にまで至る説明をすることから、彼の主張が単なる観念論とみなされる事実があった。より高次の理想を論理的に追求したとき、形式原理としては、最終的に、彼がいう究極理想（これは理想自体といってもいいであろう）にまで至らざるを得ない。そしてそのときの理想の内容が、真・善・美のような価値であるとされたとき、やはり単なる観念論との評価が強くなる。それでも彼は、そうした理想を主張し続けていた。それはなぜか。

第四項 社会改造論における理想主義の必要性

- 理想主義の根底にある人格主義 -

杏村が提唱する理想主義は、必ずしも高尚迂遠なことを主張する立場ではない。たとえば賄賂を受け取る受け取らないが任意の場合、断固としてこれを拒絶したならば、その時われわれはひとつの理想を実現したことになる。また、生活に困窮していても、選挙の時に投票の買収に応じなかったならば、やはりひとつの理想を実現したことになる。これらの例においてはたらく、一般に「良心」と呼ばれるものを「理想意識」のひとつとみなす杏村は、

斯様にして我々は、この人生の中に理想意識の厳然と存在することを固く信

じ、またその理想意識に随つての行動が人生の中に必らず実現せられて行くことを固く信じて行動してゐる。人間としての生き方のこの根本態度を「理想主義」と呼ぶのだ。そして我々は人生に於ける行動の法則のすべての根拠をこの理想主義に求めてゐる⁽¹⁴⁾

と述べている。これは平易な説明であり、このような理想主義については、現実の社会問題の解決に関する有効性についてはともかく、生き方の根本態度というその内容には賛同されやすいであろう。しかし、それでは本来理想とはなにか、を深めていったとき、彼は、

理想は始終ぐらつく様なものであつてはならぬ。ぐらついてゐる間は、まだ究極の理想に達してゐないのだ。このことを、「理想は永遠不変的だ」といふのである。日本人にだけ適用せられる理想、婦人にだけ当て嵌まる理想、子供にだけ要求せられる理想といふものはない。〔中略〕かうして場合場合で変る理想は、実は余程枝葉の方の理想である。日本人にだけ適用せられる理想の背景には、凡そ世界全体のいかなる人間にも適用せらるべき究極の理想があり、その理想の輝きに照らされて、所謂日本人だけの理想は意味を持つたものになる筈である。〔婦人についても同様に〕男子と婦人の活動の背景に、或る永遠不変の理想がある⁽¹⁵⁾

と述べることになる。これも説明としては平易であろうが、はたして究極の理想に達することなど可能なのか、そうすることは本当に必要なのか、という疑問が生じ、こうした疑問が解決されない場合、さらには否定的な意味での観念論として批判されることにさえもなる。

それでは、先の理想意識としての「良心」にもとづく理想主義にとどめておけばよいということになるのか。杏村は、一般的な改造論の中に「理想主義的改造」と「心的改造」の混雑がみられるという。改造論としては、「心的改造」と「物的改造」が語られることが多い。それらについて杏村は、

宗教や道徳の力によつて人間の良心を刺激し、過度に発達した人間の所有心、支配心等を抑圧せしめようと力めるのが心的改造であり、社会主義、無政府主義、其他某々主義の所説に随つて、政治的、経済的に、社会組織の改変を為すが物的改造である理解する如くに見えて居る⁽¹⁶⁾

という。そして彼は、こうした改造を疑問視する。心的改造と物的改造では、ど

の程度までが心的であり、どの程度までが物的なのか判然としないし、両改造はどのように関係するのかも明らかではない。さらに、そもそも心的改造というとき、それは、たとえば脳の中がそれに当たると考えられるような、心的な対象を改造しようというのか、それとも対象は何でもかまわないからそれを心的に改造しようというのか、そこからして問題になってくる。そのため、彼は、心的・物的のように「非科学的な述語の使用を避くるは勿論として、此れを理想主義と同一視す可きで無い」⁽¹⁷⁾というのである。

それでは、理想主義は科学的なのか。杏村は、理想主義が「方法的」用語であることを強調して、次のように述べている。

理想的とは事物の見方に、価値へ関係せしめて見て行く遣り方であり、自然的とは価値に関係無く、単に自然科学的、存在的に見て行く遣り方である。斯様に言へば、此の二種の見方は共に方法的の見方であるから、適用せられる事物によつての拘束を受けないことは明瞭であらう。理想主義とは無限に価値の実現を計る努力の謂である。純粹形式的にして、存在とは別世界的なる理想の楔を存在の土の中へ打ち込み、存在の土泥に理想の光を帯ばしめて行く努力の事である⁽¹⁸⁾

この中で「自然的」とされているのは、自然主義に対する理想主義という関係を意識した上での「自然的」である。即ち杏村は、自然主義に対する文化主義を主張して自然主義とは異なる事実に対する見方を論じていたのと同じく、今度は社会改造論において目指すべき方向を明らかにするために、既存の、しかも優勢な改造論を支える、唯物史観的・自然主義的・自然科学的な思潮に対抗して、理想主義によって、価値に関係させた見方を提唱していた。このことについて彼は次のように述べている。

唯物史観的に、自然主義的に、自然科学本位に、社会の改造を計るとして、一体其の行き着く先は何処であるか。盲滅法に改造するのは改造では無く単なる破壊である。自然科学的知識は改造の方法、道程に光明を与へ、此に指導の便宜を与へるかは知らぬが、何も其れが直ぐに目的を与へるものでは無い。否な寧ろ目的を与へる自然科学は最早科学では無い。理想を律せざる改造運動は仏作つて魂入れざる運動である⁽¹⁹⁾

だが、理想主義に反対する者は次のようにいうかもしれない。およそ人間である

限り、それが唯物史観論者であっても自然主義者であってもそのほかどのような主義者であっても、なんらかの理想をもたないはずがない。どのような改造論であっても理想のない改造などではしない、と。こうした反論に対して杏村は、

如何にも私は其等の理想主義反対の社会改造家も一の理想を持つて居る事を認める。其の議論の中に常に一の理想の含まつて居るのを看過しない。併し私は其等の人のものであつても其れは理想であるか、手段であるか、空想であるか少しも分らないものになつて了ふ。其れに引き換へ、私は理想とは純粹形式的なる価値であると言ふ。理想に何等かの内容的實辞を附加するは不可能である。内容的實辞の附加せられるものならば、其れはやはりたゞの手段である⁽²⁰⁾

とさらに反論していた。たとえば一般的に、「自分は将来陸軍大将になることが理想である」とか「自分の理想は商売で大儲けすることである」といった理想の語られ方が通用している。だが、杏村の観点からすれば、そこにある理想は普遍妥当なものではなく、同じ「理想」という言葉が使われていても、それは実は個人的な「欲」のことである。このように、どのような主義者も理想をもっているにしても、その内実が本当に理想にふさわしいものなのか、それとも自分の立場を高調するための手段なのか、はたまた単なる空論なのかは「理想」という言葉だけではわからないというのであった。

では杏村の場合はどうなのか。上に引用した杏村の論文は「社会思想に於ける理想主義の長所」というタイトルであった。これは、大山郁男が理想主義を批判する目的で書いた諸論文、特にそのひとつである「社会思想に於ける理想主義の弱点」に応える意図で書かれていた。「社会思想に於ける理想主義の弱点」の中で、大山は、一般的な理想主義を批判し、

彼等〔理想主義者〕にしても、苟くも現代の空気を呼吸している以上は、科学の否定者ではあるまいから、彼等がそれだけの用意を持つて居ることは当然の話である。仮りに彼等が科学の否定者であるにしても、彼等が相手取つて居る現代社会に住んで居る万人はさうでないのだから、彼等にして苟くも万人をして彼等の理想を承認せしめ様とするのなら、彼等はその理想の客観性を科学的に證明しなければならぬ筈である。所が、彼等が主張してあるやうな超越的理想の客観性は、科学的には絶対に證明が出来ないものである以上、彼等

はそれを万人に承認させようとするやうな無用な企てをやめなければならない
筈である⁽²¹⁾

と論じている。大山は、杏村と同じく、社会改造論における「心的改造」「物的改造」の区別には意味がないとしている。しかし大山は、杏村とちがって、理想主義を批判していた。それは、従来の理想主義が、ア・プリアリに理想を設定し、それを価値の基準としている、という批判だった。そこで彼は、理想の客観性の証明を求めている。ここに杏村と大山の大きなちがい、と同時に同様の方向性があった。

大山は理想主義によって掲げられる理想がア・プリアリであることを批判するのだが、杏村は、大山と異なり、理想がア・プリアリであることを否定できないという。杏村にとって、理想は価値であり、真・善・美などの価値は、文化主義の提唱において述べられていたように、経験に対して論理的に先行するものであった。ここに彼らのちがいがある。一方、大山はア・プリアリな理想の客観性の証明が必要と主張したのだが、杏村もその必要を認めまさしくそのことを哲学的な考察によっておこなおうとした。

ただし、杏村に特徴的なのは、彼の理想主義が、常に現実をめざしていたことであろう。言葉の上では、理想と現実是对語的に使用され、どちらかが重視されれば、もう一方が弱まるようなとらえ方がされやすい。しかし杏村の観点からすれば、根本的に両者はちがう世界に属している。彼は、もしもなんらかの理想が実現した時があったとしても、それは理想が現実になった時ではなく、それまでの理想が消滅した時とみなす。とはいえ、その時、理想自体が消滅したのではない。それは、新たな現実に対して、やはり新たな理想が生まれた時でもある。だが、これでは理想を観点とした現実批判は永久的に継続することになってしまうであろう。杏村はそれを否定しない。いやむしろそうなることを肯定して次のように考えている。

我々の生活内容はいかにしてその全部を尽し得べきか。人生はそれほどに決定的な、貧弱なものではない。生命は永遠に新しく、それは形式によつて永遠に規制せられる。これが価値は、永遠の人間努力によつても遂に現実的には実現の期なしといふ所以である。価値が現実的に達成せられないことは人生を寂寥たらしむるものではなくて、却つてそれに感激を覚えしめる所以のものだ⁽²²⁾

そして彼のいう理想とは、社会改造の実際的な運動の前段階として、諸個人の人生観や社会観を回転させるために、現実をいかにとらえ返すか、要するに、現実批判の観点であった。

このように、杏村の理想主義は、事実の見方について彼がいう通り「方法的」な用語であったし、科学的かどうかをいえば、自然科学ではなく、価値についての哲学を中心とした文化科学の方面からのその見方として、理想の客観性を確保しようとしたという点で科学的であったと考えられる。そして、改造原理としての杏村の理想とは、現実を分析するときに必要な批判原理であった。杏村は、理想主義の必要性を次のように語っている。

事実だけからは何の方針も出るものではない。事実をどんなに調査して見たにせよ、斯々しなければならぬといふ判断や行動の選択は、我々の理想を根拠とするのだ。それを否定するならば、議論も立てられなければ、行動の基準もなくなつて了ふ。理想主義はすべての考察の基準である⁽²³⁾

ここには、文化主義の場合と同じく、事実だけにもとづく、存在一元論的な「ある」が支配的な見方からは、「あるべし」という規範的な見方が生まれず、との同様の彼の主張がみられる。

それでは杏村の文化主義と理想主義はどのように異なるのか。基本的に現実批判の立場としては両主義は同じであろう。だが、文化主義によって、杏村は、もっぱら存在的な世界観だけではなく価値的な世界観があり得ることを主張していた。その時、杏村の批判すべき対象は、主に自然主義であり唯物史観であった。それに対して、彼の理想主義では、より広範な諸社会改造論が強く意識されていた。そこには、自然主義や唯物史観はもちろん、社会主義やマルクス主義にもとづく改造論が批判の対象となっている。そしてさらに、文化主義の時点では、杏村と同じ陣営にあったといってもいいであろう、芸術・教育・文芸・宗教など文化的とされる分野を重視した改造論も批判の対象となっている。すなわち、本論でみた広義の改造論にも狭義のそれにも通底した、改造論に必要な理想のとらえ方が問題とされていたのであった。杏村が、

我々は今や日本の生活を改造する為めの根本的基準を立てねばならぬ。即ち其れは我々の根本理想だ。根本価値だ。日本を改造する為めの理想は、世界を改造する為めの理想を離れて居ない。寧ろ前者は後者の一部だ。又今、此の、

現に在る世界を改造する為めの理想は、凡そ永遠に人間を改造する為めの理想と別なるもので無い。寧ろ前者は後者の一部だ。若し此等相互の間に理想争闘を起すとすれば、後なるものは当然、前なるものに優越する⁽²⁴⁾

というとき、彼にとって必要なのは、政治・経済・芸術・教育そのほかにもとづいた個々の原理を矛盾なく調和させるような「根本理想」であり、しかも日本における社会改造に資するだけでなく世界を改造するほどの理想、そうした理想をもって杏村は理想主義を標榜していた。

そして、こうした彼の理想主義には、さらにそれを根底から支える立場があった。彼は次のように記している。

社会思想の根本的要求を尋究すれば、我々は結局に於いて、そこに自由を高調するものと、奉仕を高調するものとの二群を見出す。表面的にはそれらの思想はこの力点の相違によつて相互の争闘を続けてゐる。併しこの二群の思想は、理想主義の根柢に立ち、〔中略〕完全に統一歸結せしめらるべきものに相違ない⁽²⁵⁾

ここに示される理想主義の根底に立つ「自由」と「奉仕」とは、いうまでもなく、杏村の考える人格のはたらきであり、人格は、それらのはたらきを「統一歸結」している。理想を批判原理とする理想主義の立場から、現実を批判することで「あるべき」方向を探り、その結果に対して「自由」と「奉仕」のどちらかが選択される。そのどちらを選ぶにせよ、選択は人格によって決定される。こうして、杏村は、文化主義と並び、彼の理想主義においても、やはり人格主義を根本原理としていたといえるであろう。

杏村の考える究極理想社会において、諸個人は「自分自身で考へ、自分自身で判断する」人間であるとされていた。それは自由な判断の主体である人格をもった人間である。それではそのような人間の育成はどうするのか。杏村は教育に期待するのである。文化主義や理想主義の立場から、社会改造に向けて事実や現実に対して批判的な見方ができるとしても、その見方をすること自体が人格に依っている。個々の具体的な改造に先立つ、人生観や社会観、世界観の転換に人格が必要ということは、社会改造に人格の形成が必要ということであり、そのため改造には教育が不可欠である。ところが実際におこなわれている教育は、ブルジョ

ア資本主義社会を維持・強化するために、個人を鑄型にはめこむような教育である。それに対して対抗的な自由教育も提唱されている。ただし、自由教育がもつ意義の重要性は認められるものの、杏村からすると、その教育は対抗的な位置にとどまっている。教育はそれと不可分な社会概念との関係からして考え直されなければならない。特に、教育の目的は考え直されなくてはならない。そのために教育学は、「あるがまま」の社会概念にもとづいて、教育を研究の対象としなければならない。このような問題意識をもって杏村が構想したのが彼の社会教育学であった。

註

1-2

土田杏村「理想社会と権力」（『解放』、1922年10月）、179ページ。

3 同前、179～180ページ。

4 同前、183ページ。

5 同前、180ページ。

6 鹿野政直編『近代日本思想史大系34』、筑摩書房、1977年、432～433ページ。

7 土田杏村『社会哲学原論』、内外出版、1925年、3ページ。

8 同前、134ページ。

9 土田杏村「ホルムスの社会改造論」（『文化』第二巻第一号、1921年3月）、35ページ。

10 土田杏村「新理想主義哲学概説」（『文化』第四巻第一号、1922年5月）、31ページ。

11 土田杏村「社会運動の道徳的基礎を論ず」（『文化』第四巻第五号、1922年10月）、26ページ。

12 土田杏村『現代哲学概論』（《全集一》）、初出1928年、281ページ。

13 同前、281～282ページ。

14 土田杏村「社会理想主義とは何か」（『公民講座』、1930年1月）、73ページ。

- 15 土田杏村「文化とは何か」(《全集九》)、初出1923年、23ページ。
- 16 土田杏村「社会思想に於ける理想主義の長所」(『文化』第二卷第三号、1921年5月)、19~20ページ。
- 17 同前、24ページ。
- 18 同前、25ページ。
- 19 同前、26ページ。
- 20 同前、28ページ。
- 21 大山郁男「社会思想に於ける理想主義の弱点」(『我等』、1921年10月)、24ページ。
- 22 土田杏村『現代哲学概論』、282ページ。
- 23 土田杏村「社会理想主義とは何か」、73ページ。
- 24 土田杏村『社会哲学原論』、129ページ。
- 25 土田杏村『現代哲学概論』、289ページ。

なお、本節で分析した杏村の諸論が発表されていた時期からは10年以上後のことであるが、経済哲学者杉村廣蔵は、「理想主義概論」(石原純他編『廿世紀思想第一巻』、河出書房、1939年)の中で、哲学者について、

現象界と一応、区別された本質的なものとして、理念の界を考へることは、すべて哲学する人にとつて、共通な考へといつてよい。問題なのは、その別世界を、どのやうに理解し、いかに秩序づけるかにあるので、かやうな世界があることを知らぬといふのでは、哲学する資格はないのだ。いひかへれば、二つの世界に住むことが、哲学する者の性格なのである(26ページ)

と語っている。ここで杉村の使用している「現象界」と「理念の界」が杏村のいう「現実」と「理想」に相当するならば、秩序づけに努力していた杏村は、杉村のいう「哲学する者の性格」を十分に有していたといえるであろう。そして、杉村はまた、現代は二元論的世界観にもとづいて一元にまで超克しようとする西洋的理想主義の転換点であるとみなし、「近代思想が、あくまでも動的な性格を拡充して、『純粹活動』の域にまですすみ、理念と感性の二元的対立にとらはれない境地を打開することになるならば、近代思想において、理想主義の努力は一つの解脱に達し得るものといふことができよう」(49~50ページ)とも述べている。

この「純粹活動」とは、

〔ギリシア思想が〕つねに一義的に確定せしめられた概念をつかみかさねて、全世界の秩序をうつし出さむとするので、雑然たる相貌を、そのままに、一糸乱れざる実在の姿として観得することを建前とする東洋思想とは、著しく異つたものといはざるを得ない。況して、この東洋思想における静けさは無限の動きを、あるがままに受けとるところから由来するものである（49ページ）

と説明される中の、「雑然たる相貌」を「実在の姿として観得する」活動を意味している。はたして杏村の理想主義の努力が杉村のいう「解脱」にまで達したかどうかは更に検討を要する。ただ、常に「あるがまま」の認識に配慮していた杏村は、心的改造と物的改造のどちらでも、改造論として一方だけでは不当であるとして、そうした区別を超えた全体的な改造に必要な理想という観点を打ち出そうとしていた。このことからすると、彼は、自身は社会改造論において価値と存在の二元的対立の構図にもとづきながらも、その構図を打開する、杉村のいう「境地」をめざしていたといえるのではないだろうか。そして、もしもそうであれば、このことは、社会改造のための杏村の哲学的考察が、同時に、社会改造という実際の課題を介して、その「動的な性格を拡充」することを要求された結果であったとも考えられる。